

米国のパレスチナ系英語詩人たち



ファーディ・ジュダ

米国の現代英語詩は、二〇世紀初頭頃から独自の発展を遂げてきた。伝統的韻律から離れた自由詩の重視、正書法にと

られない大胆な改行や口語の使用、詩を声に出して届けるポエトリー・リーディング／スポークン・ワードなどがその大きな特徴であり、その根本には既存の型や常識を打ち破る姿勢が存在した。この歴史や特徴に、インターネットによる発表機会の広がりも相まって、今日の米国現代詩は、周縁化されてきたさまざまな人々が言葉を紡ぐ空間にもなっている。

その中で筆者が注目しているのは、英語で書き語るパレスチナ系の詩人たちだ。彼らは「パレスチナ人」としてのエグザイル経験と、レイシズムはびこる米国を「アラブ人」として

生きる経験、少なくともこれら二つが折り重なったところから声を発して、自らの足場を築こうとしている。うち、四十年のキャリアを持つネオミ・シハープ・ナーイ (Naomi Shihab Suleh) と、黒人の経験とパレスチナ人の経験を重ね合わせて語るスヘイル・ハンマード (Suhair Hamad) については、英文学者の小泉純一氏が、『アメリカに響くパレスチナの声』(水声社、二〇一一年) および『中東現代文学選2016』で論じている。今回の文学選では、彼女たち以外の詩人による作品を、ごく一部だけご紹介した。

最前線で十年以上にわたり存在感を放っているのが、テキサス州ヒューストン在住のファーディ・ジュダ (Fady Joudah) である。彼は一九七一年に同州オースティンで生まれ、リビアとサウジアラビアで子ども時代を過ごした。二〇〇八年から二〇一九年にかけて四冊の詩集を発表しているほか、マフムード・ダルウィーシュ作品など、パレスチナのアラビア語詩の英訳にも携わる。ジュダが書くのは自由詩だが、さほど奇をてらうこともなく、医師でもあり父親でもある自身の生活の中から、生と死に向き合う者として、パレスチナ人としての問いを誠実に彫り出す作品が多い印象がある。今回取り上げた「川を二たび」は、赤ん坊の息子と過ごす時間の中に、エグザイルを生きるうえでの苦

悩や望みを見る一篇だ。

作中に登場する「映画」は、パレスチナ人のエグザイル経験を描くドキュメンタリー映画 *The Shadow of Absence* (ナスリー・ハッジャージュ監督、二〇〇七年) を指すそうだ。この映画を見て、「自分のものといえる土地に埋葬されたいというのは、ちょっと大げさな願いはないか」と発言したジャーナリストが実際にいたのだという。米国で育てば、息子もこの「ジャーナリスト」のように、難民が抱くワタンへの想いを理解できなくなるのかもしれない。そんな中でパレスチナの記憶をどう伝えるべきなのか。父親が米国に住んでいるながら、典型的な「米国人」からかけ離れている理由をどう説明すべきなのか(彼が愛唱歌「私を野球に連れていって」を歌えないことはその象徴だ)。どこの国歌も覚えていない自分は、「国」なるものとの付き合い方を、我が子にどう教えるべきなのか。裏庭に置かれたトランポリンという「古き良き米国」的な情景や、中東の古典的恋物語「カイスとライラー」に言及する母親の姿などを行き来するように描きつつ、詩人は我が子に「いかなる国も愛さず いずれも憎まぬように」、そして様々な言語とそれらが抱える歴史に思いを馳せるようにと語りかける。「愛国心」を持つことや英語を話すことが当然とされ、移民が公の場で「英語を話せ」と罵られたとい

う話も後を絶たない米国において、この教えは確かに打ち込まれた楔である。



ハラ・アルヤーン

ジューダに負けじと多作多芸なのがハラ・アルヤーン (Hara Alayan) だ。彼女は一九八六年、米国中西部のイリノイ州で生まれたのち、中東や米国の各地を転々として育ち、現在はニューヨークに住んでいる。二〇〇八年のデビュー以来、詩集四冊に加えて長編小説を二作著す傍ら、臨床心理士として働いてもいる。彼女の作品で印象的なのは、五感に訴える鮮やかな表現や自らの苦悩の語りの中に、個人の枠を超えて受け継がれたエグザイルやディアスポラの生が垣間見える瞬間である。翻訳した「一九九九」は、米国各地における生活の記憶を縦糸に、難民の子孫としての中東の記憶（あるいはその欠如）を横糸にした一篇だ。幼少時の詩人は学校のロッカーから色鮮やかな「パービー・ピンク」のジャケットを盗むが、そのジャケットには何も入っていなかった。米国のきざらした女の子文化を象徴するかのような品物を無理やり手に入れても、そこから彼女が得るものはなかったのだ。後半で「シーツを口の形に固めて」キスの真似事をしていた記憶と性暴

力に遭った記憶が連なって描かれることもまた、米国における憧れと現実の落差を表しているかのようである。

他方、自分と家族のルーツであるはずの中東における生活の記憶は、詩人にはない。残っているのは、アメリカの果実とも中東の果実ともとれる曖昧な「とげとげの梨」を、「舌がかゆくなる」苦痛も構わず口に詰め込んでいた記憶。そして、覚えておかなくてはならないにもかかわらず「忘れてしまった」ものがあるという感覚だ。アルヤーン本人曰く、物理的に故郷を追われて久しいパレスチナ難民が土地の記憶さえも失ってしまうことは、故郷が永久に消え去ることと同義であるというのに。これらさまざま

な記憶の断片の織り目から、時折棘のように覗くのは、早朝にひとりきりで東（パレスチナの方角だ）へ飛ぶ鳥を見つめ、荷物をまとめては家を去ることを繰り返す父の姿である。詩人個人の記憶という織物に覆われているささくれた素肌は、異邦をさまよいながらワタンの喪失を生きてきた彼女の家族の歴史そのものなのだ。



ジョージ・エイブラハム

最後にジョージ・エイブラハム (George Abraham, 生年不詳) をご紹介したい。フロリダ州出

身で、現在ハーヴァード大学の生物工学博士課程に在籍しているエイブラハムは、執筆のみならずスポークン・ワードやポエトリー・スラム（観客を前にした詩のバトル）でも盛んに活動している。今回取り上げた一篇では、植民地主義が引いた線によって帰る場所を失ったパレスチナ人が、米国でさらに線引きされ、捻じ曲げられていくさまが語られる。一九四八年のナクバにより、パレスチナの人々は一人残らずワタンを喪失した。物理的に故郷にとどまった者たちもいたが、彼らを照らす太陽は「少し小さく」なり、彼らが食す果物が実る土地には「壁」が築かれる。詩人の家族は米国に移り住んだが、そこでは「正しい」米国人とそれ以外が暴力的に線引きされる。はみ出した者は攻撃され、パレスチナ人としての政治性や精神性は削り落とされていく。

こうした線引きの暴力は、身体や性のあり方に線を引いて排除する構造とも重なる。詩人は、「ノンバイナリー」としてカミングアウトしたとき、「クィア」のパレスチナ人男性に受け入れられなかったと記す。クィアという語にはさまざまな意味があり、詩人がいかなる意図で使用しているかは自明でない。この語は当初、性的マイノリティに対する差別語として使われてきた（現在もこの意味で使われることがある）が、一九八〇年代のエイズ危機に端を發

するクイア・アクティヴィズムの中で、社会のメインストリームに対する抵抗を表す語として用いられるようになった。^{※4} またこの政治性を脱色されて、性的マイノリティの総称のように用いられることもある。どちらの意味で「クイア」が用いられているにせよ、このエピソードは、特定の境界を認識して抵抗している人であっても、本来ならばつながっている人々の「海」に何かのはずみで別の境界を引き、ぼつんと閉ざされた「島」になってしまいうるのだ、^{※5} というように読める。

性別二元論から、占領者と被占領者が対等であるかのように語られる「紛争」の構図も、不安な線引きの暴力性と常に闘っている詩人がエイブラハムだ。エイブラハムは詩集『生得権 (Birthright)』で実験的な詩形なども駆使している（例えば今回の作品では、自然な読み方に逆行するような変則的なインデントや改行を用いたり、作品中の区切りを示すマークとして閉じていない丸括弧の片割れを使用したりしている）が、これは自分の言葉がさらりと読み流されて分かりやすい枠に押し込まれてしまいうる^{※6} への抵抗でもあるようだ。

この他にも多くの詩人たちが「パレスチナ」と「アメリカ」の重なりを、絡まり合いを、あるいはその隙間を生きる経験を、それぞれの場所から語っている。地中海を越え、大西洋を跨

いでも引き継がれるナクバの経験の現在がここにある。

※1 原成吉『アメリカ現代詩入門 エズラ・パウンドからボブ・ディランまで』勉誠出版、東京 二〇二〇年

※2 Rumens, Carol "Poem of the Week: Twice a River by Fady Joudah", *The Guardian*, 12 March 2018, <https://www.theguardian.com/books/bookblog/2018/mar/12/poem-of-the-week-twice-a-river-by-fady-joudah> [Last Accessed 18 January 2021]

※3 Alyan, Hala "In Dust" Suleiman, Yasir [Ed.] *Being Palestinian: Personal Reflections on Palestinian Identity in the Diaspora*, Edinburgh, Edinburgh University Press, 2016, pp. 63-65.

※4 菊地夏野・堀江有里・飯野由里子「クイア・スタディーズとは何か」『クイア・スタディーズをひらく アイデンティティ、コミュニケーション、スペース』景洋書房 二〇一九年

※5 Abraham, George "Interview: George Abraham", *Vagabond City*, 18 May 2020, <https://vagabondcitylit.com/2020/05/18/interview-george-abraham/> [Last Accessed 18 January 2021]